

ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.13 2005年6月

ABIC 設立後5周年を迎える	2
第10回理事会・第5回通常総会開催	2
2004年度事業報告 2004年度決算及び2005年度予算 2005年度事業計画・役員等	3

海外での活動

ABIC会員3名がインドネシア災害復旧支援活動	
国際緊急援助隊 自衛隊支援への参加体験記	6
インドネシア津波災害・自衛隊支援活動に参加して	8
O D A 関 連 パキスタンにおけるシニア海外ボランティアの活動	10
バンパの街、工業製品輸出に意欲	11
北スマトラへ出張講義に	12
ブラジルでの日系人国外就労者情報・援護活動を終えて	13

国内での活動

O D A 関 連	ジェトロより「アンデス乾燥果実普及市場調査」受託について	15
外国企業支援	「健康博覧会2005」の中国語通訳（バイリンガルアドバイザー）体験記	16
自治体への協力	大分県産品対中輸出振興アドバイザーとしての活動を振り返って	17
教 育	小中高校向け国際理解教育グループだより 在日外国人小・中学生に対する日本語指導活動に確かな手ごたえ	18
留 学 生 支 援	留学生支援グループだより 東京国際交流館での活動	19

事務局だより	個人情報の取扱いについて	19
	会員入会のお願い	20

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC) <http://www.jftc.or.jp/abictop.html>

〒105-6106 東京都港区浜松町2-4-1
世界貿易センタービル6階 (社)日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港2-8-24 pia NPO 4階 413号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

ABIC 設立後5周年を迎える

去る5月31日に開催された国際社会貢献センター(ABIC)の理事会、総会において、佐々木会長より下記の挨拶がありました。

「ABICは今春設立後5周年を迎えた。これまで関係者の方々の大きなご支援・ご協力を頂きながら、所期の目的に向かって順調に拡大、社会的に認知度も高まって来ている。今後一層の発展を期待している。」



第10回理事会・第5回通常総会開催

5月31日、日本貿易会会議室にて第10回理事会および第5回通常総会が開催されました。2004年度事業報告および収支決算報告、2005年度事業計画および収支予算、役員の補充選任が審議され、いずれも原案通り承認されました。

2004年度も色々な分野で幅広い活動が展開されましたが、特筆されるのは地方自治体を通じた中小企業支援の分野です。国内の多くの自治体から県下の中小企業支援、産業振興などの目的でABICからの会員紹介の要請が急増しました。通訳、翻訳から経営相談、海外進出、販路開拓などまで広範囲に及ぶ支援業務において多くのABIC会員が活動されました。

2005年度もこの分野をはじめとし、教育関連、留学生支援などでの国内活動、また海外では政府のODA関連などで多くの会員が海外で活躍されることが期待されます。

事業報告と事業計画、予算、役員は次のとおりです。



2004年度 事業報告

1. 国際社会貢献に係わる人材の紹介・推薦事業

合計 48名 476名
総合計 524名

分野	主要事業	2004年度事業計画内容	2004年度の実施状況	半年以上の長期	短期・スポット
海外関連の活動	ODA関連人材推薦、応募	ODA関連専門家派遣への人材推薦・シニア海外ボランティア派遣への応募、人材育成セミナーへの講師派遣	●経済産業省等の推薦を受けて、JICA長期専門家としてカンボジア、パキスタン、東ティモールへ、またスマトラ島沖津波被害の復興支援の一環として通訳の短期専門家としてインドネシアに3名、さらにカザフスタン日本センターでのセミナー講師として1名、合計7名の専門家が派遣された。 ●JICAのシニア海外ボランティアでは一般公募案件への応募を呼び掛けた結果、春および秋募集にてチュニジア、ボリビア、パナマ、ガーナなどに合計6名が派遣された。 ●JETROが実施するメコン地域およびベトナムでの現地調査目的で各々1名が派遣された。また同じくJETROがアンデス諸国の食材輸入促進を図っているが、ABICはその一環として日本における現状調査業務を昨年度に続き、再び請負い、会員3名よりなるチームを組成し3月にその報告書を提出した。さらにJ-フロント事業の審査員として1名が採用された。	9名	10名
		人材育成研修への講師派遣	●海外技術者研修協会（AOTS）が実施するタイ企業経営研修に講師を8名派遣、さらにインドネシアでの現地短期研修に1名派遣された。 ●アジアクラブが実施したカンボジアシンポジウムに講師を2名派遣した。		11名
国内での活動	国内での国際化	中小企業への直接人材推薦	●海外進出、販路開拓、経営相談などの目的でABICより直接中小企業へ人材推薦する活動が増加してきた。	4名	20名
	地方自治体協力	自治体の中小企業海外展開支援、外資系企業誘致等国際化関連事業に必要な人材の推薦、講演、研修等非常勤・スポット的活動への人材推薦・派遣	●大分県の県産品対中国輸出アドバイザーとして1名採用。 ●東京都が2003年度から発足させた都内中小企業の販路開拓事業にビジネスナビゲーターとして本年度は昨年度より1名多い10名が参画した。 ●東大阪「ものづくり拠点＝クリエイション・コア」に本年度も4名が採用された。 ●埼玉県が中小企業の販路開拓支援のためセールススレップ制度を本年度秋から開始したが、1名が派遣された。 ●横浜市産業振興公社主催の「輸出セミナー」に講師2名を派遣。その他埼玉県のベトナムセミナーなどにも講師を派遣した。 ●千葉県産業振興センターとの業務委託契約に基づく中小企業支援で本年度合計24名が活動した。また同県海外取引アドバイザーとして6名が採用された。 ●愛知県の企業誘致アドバイザーとして2名が採用された。	35名	55名
		外国企業の日本進出	●国際見本市出展外国企業へのビジネス通訳9件。		9名
	教育	国際化教育	●2004年度は法政大学、中央大学、創価大学、東京大学、青山学院大学、北陸大学、信州大学、同志社大学など21大学で455コマ、延べ205名、また明治リパティ・アカデミー、早稲田大学EC、海外職業訓練協会など10ヵ所325コマ、延べ53名が講師として参加した。		267名
		小中高校での国際化教育への講師派遣、外国人生徒サポート	●小中高校への国際理解教育での講師派遣では、13校に60名を派遣した。 ●特記すべき講座として、昨年度に続き横浜商業高校の国際学科から半年間8講座の国際理解教育授業を受託し講師8名を派遣した。 ●また東京都のいくつかの公立小学校に通う外国人児童のために、その国の言葉で日本語を指導する講座が昨年度の5講座から12講座に増えた。5校に講師12名を派遣。		60名
	一般ボランティア	留学生支援	●「日本語広場」8コースを継続。約80名の留学生およびその家族が受講している。講師として会員13名活動。 ●日本の伝統文化の紹介を行う「日本文化教室」を開設し、茶道・華道・書道・囲碁・将棋・空手教室を月一回土曜日に開催している。留学生参加者約30人。講師として10名が活動。 ●11月20～21日「第5回交流館フェスティバル」にて、茶道、華道、書道、空手などの日本文化教室の成果を披露、講師6名が活動。今回初の試みとして日本語広場を受講している留学生を中心とした「日本語スピーチコンテスト」を企画し実施、審査員として講師6名が活動。 ●10月23日、新入館留学生支援バザーを実施、3名が活動。 ●2005年2月26～28日、東京国際交流館主催の留学生スキーツアーに2名が参加、協力。		44名
		ホームステイのアレンジ等	●8月7～8日、日韓青少年交流大学生訪日に伴う、留学生のホームステイに2名が協力。		
		その他の活動	●日本英語交流連盟主催大学対抗英語ディベート大会予選会でのchairpersonボランティア・スタッフとして4名の会員が活動。		

2. その他

分野	主要事業	2004年度事業計画内容	2004年度の実施状況	半年以上の長期	短期・スポット
広報活動			●新規活動会員増強のため入会案内、活動紹介パンフレットなどの配布を実施。 ●活動会員向けの「ABIC Information Letter」を3回発行（8月、11月、3月）、会員および関係先に配布した。 ●独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構他の主催「高齢者雇用フェスタ2004」（東京ドームシティ・プリズムホール）に出展し、ABICをPRした。当日、行われたNHK土曜フォーラム公開シンポジウム「団塊の世代は、どう生き、どう働くのか？」の中で、ABICの活動がビデオで紹介された。また本シンポジウムはNHK教育テレビにて放映された。 ●2004年11月20日、21日、東京国際交流館「第5回交流館フェスティバル」にて、ABIC専用ブースにてABICの活動を来場者にPRした。 ●小学館「シニアポスト」第2号「60歳からの働き方」（2月20日発行2万部）に会員4名のインタビュー記事が掲載されるとともにABICの活動が紹介された。 ●ABICホームページおよび『日本貿易会月報』『ABICプラザ』のコーナーで、ABICの活動報告や活動会員のレポートを掲載。また月報2004年4月号にはABICの特集を企画し、さらに2004年12月号の特集「豊かな高齢化社会に向けて」では、会員80名からの豊かな高齢社会に向けたアイデア等を募ったアンケート結果と会員の寄稿文を掲載し広く配布。		
事務局体制			分野毎に活動会員からなるコーディネーター20名による事務局体制の維持・強化。 経理・総務：宇佐見和彦 留学生支援：千野滋樹、山田雅司、佐藤徹 大学講座：和田稔、増田政靖、森和重、布施克彦、猪狩真弓、赤田堅 小中高校講義：藤村登、細野良敦 インドネシアデスク：橋本政彦 メコンデスク：吉川和夫 外国企業サポート：大道豊彦 関西デスク：藤原照明、大西稔男 千葉県実務支援：篠田正義 中小企業サポート：高廣次郎 中国デスク：久佐賀義光		

2004年度決算 及び
2005年度予算

(単位：千円)

科 目	2004年度 決 算 額	2005年度 予 算 額
I 収入の部		
(1) 会費収入	6,700	7,325
法人会費	(4,820)	(5,420)
個人会費	(1,615)	(1,640)
会員寄付	(265)	(265)
(2) 受託事業収入	33,837	34,500
日本貿易会	(18,300)	(18,300)
その他の他	(15,537)	(16,200)
(3) 雑収入	783	800
収入合計	41,320	42,625
II 支出の部		
(1) 一般管理費	2,276	3,120
(2) 受託事業費	37,909	39,300
(3) 器具備品等	408	0
支出合計	40,593	42,420
収支差額	727	205
前期繰越金	8,584	9,311
次期繰越金	9,311	9,516

2005年度役員等

(敬称略・氏名五十音順)

会 長	佐々木幹夫	(社)日本貿易会会長、三菱商事(株) 取締役会長
名誉会長	宮原 賢次	前当センター会長、前日本貿易会会長、住友商事(株) 代表取締役会長
副 会 長	榎田 松瑩	三井物産(株) 代表取締役社長
	勝俣 宣夫	丸紅(株) 代表取締役社長
	岡 素之	住友商事(株) 代表取締役社長
	小林 栄三	伊藤忠商事(株) 代表取締役社長
	土橋 昭夫	双日ホールディングス(株) 代表取締役社長 (6月28日就任)
理 事 長	吉田 靖男	(社)日本貿易会 常務理事
常務理事	野津 浩	(社)日本貿易会 社会貢献グループ部長
理 事	東 直樹	住友商事(株) 地域総括・調査部長
	生島 一郎	(株)トーメン 人事総務部長
	稲垣 恒夫	(社)日本貿易会 理事・企画グループ部長
	寺島 實郎	三井物産(株) 執行役員・(株)三井物産戦略研究所長
	中田 徹	丸紅(株) 市場業務部副部長
	西川 徹	住友商事(株) 地域総括・調査部次長
	藤山 知彦	三菱商事(株) 国際戦略研究所長
	松田 健司	双日ホールディングス(株) 人事総務部長
	松村 滋弥	伊藤忠マネジメントコンサルティング(株) 伊藤忠ビジネス戦略研究所長
監 事	高梨 圭介	(社)日本貿易会 専務理事
顧問	池上 久雄	前当センター理事長、前日本貿易会常務理事
参 与	宮内 雄史	前当センター常務理事、前日本貿易会社会貢献グループ部長

2005年度 事業計画

分野		主要事業	重点活動内容	2005年度目標		主な新規取り組みと検討事項
				半年以上の長期	短期・スポット	
海外関連の活動	政府の経済援助関連	ODA関連人材推薦、応募人材育成セミナー等への講師派遣	● 専門家新規案件のフォロー ● JICA・SVグループの組成・応募 ● JICAやJETROを主とした新規案件への対応 ● AOTS、JODCなどへの対応	10～15名	15～20名	○ JICAの「現場重視」政策強化へのABIC参画可能性追求 ○ 途上国支援と中小企業支援の活動・自治体への協力強化 ○ JETRO輸出促進への参画
	NGOなど	NGOへの人材推薦 NGOの活動強化への協力	● NGOへのPR展開 ● 個別案件のフォロー	数名	数名	○ JICAの「現場重視」政策強化へのABIC参画可能性追求 ○ 途上国支援と中小企業支援の活動・自治体への協力強化
国内での活動	国内での国際化	中小企業支援	● 地方自治体と組んだ中小企業海外進出支援強化 ● 中小企業サポートの人材プール・取り組み体制整備	10～15名	20～30名	○ 千葉県産業振興センターとの中小企業国際ビジネス実務支援業務契約の着実な実施と今後の拡大 ○ 中小企業からの求人要請に対する積極的対応
		地方自治体等協力	● 各地方自治体へのABICのPR強化	15～20名	20～30名	○ 東京都中小企業振興公社ビジネスナビゲーター制度への参画をベースにした他自治体への展開強化 ○ 宮城県や埼玉県、関西地区における活動などを通じて徐々にABICの知名度が上昇しつつあるので、さらにこの速度を速める
		外国企業支援	● 大使館など関連組織との関係拡大 ● 地方自治体との協力 ● 各種国際見本市への通訳派遣強化	5名	20～30名	○ 関連組織への地道なPR
	教育	大学等	● 講師陣の充実と能力向上 ● 新規大学、講座の一層の拡大 ● 他の活動との連携、複合的活動の取り組み		200～250名	○ 関西学院大学との協同研究プロジェクト（米国・ヨーロッパ・中小企業）の推進 ○ 宇都宮大学でのABIC講師（11名）のみによる講座実施 ○ 名古屋外国語大学、立命館APUなど新規講座開設
		小中高校	● 小中高校での取り組み拡大 ● 講師陣の充実 ● 対外的PR強化 ● 外国人児童のための日本語講師充実		50～70名	○ 分野拡大のためにはPR活動が必須
	一般ボランティア	留学生支援	● 大学村での日本語広場・日本文化教室・文化交流活動・ホームビジット等の展開 ● バザーなど交流プログラムの推進 ● 東京国際交流館、神戸留学生会館以外への活動の拡大		50～60名	○ 留学生支援と途上国支援の活動の連携検討
合 計				50名	500名	

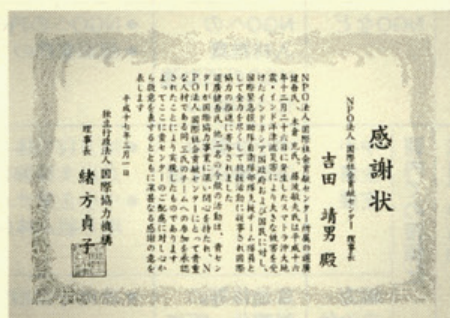
活動会員向け	懇親会	● ABIC設立5周年記念懇親会		250名	
	関西学院大学との取り組み	● 同大学との「アメリカ研究」他プロジェクト推進	20名		
	情報連絡	● インフォメーションレターの発行			
広報	広報活動	● マスコミへの積極的対応 ● ホームページの充実 ● ABICパンフレット新規発行			
事務局	事務局体制	● コーディネーター体制の整備			
	事務局運営	● 会員管理システムの整備 ● 会計システムの整備 ● 諸契約、規則・規定の整備 ● 個人情報保護対応			

ABIC会員 3 名がインドネシア災害復旧支援活動

インドネシア・スマトラ島沖大津波復旧支援のため、わが国から自衛隊が派遣されました。ABICはJICA（国際協力機構）からの要請に基づき、自衛隊支援としてインドネシア語に堪能な3名のABIC会員を推薦し、3名の方々はスマトラ島州都バンダアチエで約2週間活動されました。

下記は、前号（12号）に掲載の木倉 充氏（元 三菱商事）に引き続き、道廣 健吾氏（元 丸紅）と藤波敏夫氏（元 明和産業）のお二人の活動レポートです。

このたびこのABICの協力に対して、JICAから感謝状を頂きましたのでご報告いたします。



国際緊急援助隊 自衛隊支援への参加体験記

みちひろ けんこ
道廣 健吾（元 丸紅）

昨年暮れにインドネシアのスマトラ島沖で発生した大地震とそれによる大津波は、すでに報道されたとおり、インドネシア、タイ等の近隣諸国に多大な被害を与えた。特にインドネシア・アチェ州での被害は最も大きく、死者・行方不明は23万人を超えたと報



インドネシア国家警察発行
TSUNAMI TASK FORCE IDカード
（アチェ滞在許可証）

じられている。日本政府は、自衛隊部隊（900名）とそれを支援するJICAからなる国際緊急援助隊をアチェ州に派遣し、復旧援助支援に乗り出した。

この緊急援助隊に2月15日～3月1日の約2週間参加してこの目で見、体験した実情を報告する。

活動状況

今回派遣された自衛隊部隊の活動内容は医療・防疫・物資輸送に分かれた。一方、国際緊急援助隊のわれわれ通訳要員は自衛隊の医療・防疫活動が円滑に進むようサポートし、私は自衛隊医療チームの活動に通訳として参加することになった。

毎朝6時前に起床、朝食後7時30分、JICAの車で宿舎を出発して、自衛隊医療チーム外科専門のテント張りの診療所に8時すぎに到着。さらにそこから車で数分先の所に内科（小



家族で診断を待つ患者

児科・婦人科を含む）の診療所と薬局がある。

外科専門の診療所に津波の怪我で治療に通う患者は日ごとに減り始め、1日平均20人弱を3名の通訳が担当。仕事はそれほどハードということにはなかった。ところが内科専門診療所の方は、1日平均150人、多い日には200人以上の患者数であり、自衛隊

医師（3名）と通訳（5名）は大変であった。

朝9時前に診療所に着くと、すでに40人前後の患者が待っているのにまず驚かされた。その数は、時間とともに増え続け、ピークの10時ごろには80人程度の患者が炎天下で1時間以上も辛抱強く待っている。内科の患者の病状は千差万別で、津波に遭った際の恐怖感による精神的症状（頭痛等）、津波に飲み込まれたことによる腹痛、呼吸困難、咳、皮膚のかゆみと爛れ、背中および腰の痛み等々。けれども、治療を受けて満足げな顔をして帰っていく患者の姿を見ると疲れが吹っ飛び心が和らぐ思いがした。

診療所は内科・外科ともに土・日も通常どおり休みなしの勤務だが、自衛隊医療チームが2月20日（日）を休診にすると発表したのも、われわれも正直ホッとした。ただ、インドネシア政府軍とアチェ独立運動との紛争により、アチェ州では文民非常事態宣言が出されているので、終日、宿舎から一步も外に出ることはなかった。

被災地の見学

JICAリーダーの案内でバンダアチエ被災地の跡を見

に行ったが、海岸からの被害の状況は今までメディア報道で見聞したものをはるかに超える悲惨な様相で、津波の跡の恐ろしさをさまざまと



かつて村があった証の標識

見せつけられ言葉も出なかった。

その中で数本の太い円柱と屋根が残っている建物がポツンと立っていた。それが回教寺院で、地元民がお祈りをささげるべく集まっていた。円柱が残ったのはイスラム・アラーの力だと地元民は言っていたが、太い円柱は頑丈なうえに円筒形なので波から受ける影響度が少なかったのであろう。

津波発生から2ヵ月近く経過しても、未だに瓦礫の下から遺体が発見され、集められた数十体の遺体を積んだトラックが走っているのを見かけた。一方、バンダアチェの海岸から数キロ奥に入った市内の商店街では開店し始めた店がかなり増えているが、商品の入荷が思うようにいかず、全般に品不足気味で諸物価は上昇傾向にあると言う。アチェ州は元来天然資源に恵まれた州であり、国营石油会社プルタミナの子会社のLNG（液化天然ガス）の産出による収益の5～6%が州政府に還元されているので財政状態は悪くはないはずで、町の立ち直りは案外早いかもしれない。しかし、今回の津波大被害もあり、アチェ州政府は上述の数パーセントのリターンでは少なすぎると中央政府に対し不満を抱いているようだ。

いずれにせよ、このように焼け野原のような跡地の姿が完全に復活するのはいつのことになるのか、日本をはじめ世界各国の復旧支援を受けて一日も早い復興を願うところである。

バンダアチェでの貴重な生活体験

現在アチェ州は文民非常事態宣言が発令されており、宿舎から診療所までの車には警護の私服警官が同乗しているが、幸いにもわれわれが危険を感じたことは一度もなかった。わ



滞在先の家族と

れわれの宿舎に関しては、当初は自衛隊艦船での宿泊も検討されていたようだが、結局JICAが現地で借り上げた民家での宿泊に決まった。この民家は築20年の2階建てで1階に寝室4部屋、そのうち家主の家族が3部屋を使用、残り1部屋が私に割り当てられた。2階は寝室5部屋に共同トイレ付水浴場が5つある。この民家にJICA第1陣派遣隊のときには40人近い男女が床にゴロ寝の共同生活をしていて聞いて感心した。

延べ100人のJICAの派遣員の中で3分の2が下痢、熱中症などを訴えたとの報告を出発前に聞いていた。炎天下でのハードワークと、現地の食事、水も原因だろうが、それに加えて不自由な生活環境下でのストレスも影響したのではないかと率直に感じた。食事に関しては内地から大量の、それもいろいろな種類のインスタント食品やレトルト食品が持ち込まれており、全く問題なかった。また、民家のメイドが作ってくれるインドネシア料理もなかなかおいしく、若い派遣員（通訳）や青年海外協力隊の人々も好んで現地食を食べていたようだ。

アチェ州はジャカルタと異なり、回教規律が厳しく、ビール等アルコール類は一切御法度である。この宿舎の主人も敬虔なイスラム教徒なのでここは我慢のしどころだ。水は地元製の0.5ℓと1.5ℓのペットボトル（aqua）が買えるので、それに内地から持参の粉末のスポーツ飲料を入れて仕事場に持って行き、熱中症対策として炎天下チビリチビリと飲みながら身体に水分を補給するのだが、その時間もないほど多忙な日もあった。

宿舎での風呂は湯が出ないので当然水浴である。トイレの横に貯めてある水（井戸水でトイレ後もこの水で流す）を柄杓で汲んで頭からかぶる典型的なインドネシア方式である。私の場合、30年以上も



トイレの横にある
インドネシア式風呂（水槽）

昔にすでに経験済みなので何とも思わないが、今回数名の、30歳前の美貌の女性海外協力隊達も全然平気で行っているのには、よく訓練されているなあと感服した。

宿舎では洗濯もままならぬと聞いていたのですが、実際には段ボール箱に洗濯物（男女共通）を入れておくと3～4日で洗ってくれる。しかし湿気が多いため乾きにくく、少々湿っぽい臭いがする。通信関係では、日本

との電話は一切通じない。もちろん、日本の新聞なども手に入らないので、この2週間は日本で何が起きているか、さっぱり分からなかったが、これは仕方のないことだ。

結び

このように、バンダアチェでの生活自体は、正直言って味気ないものであったが、大きな救いは、この2週間、若い男女の青年海外協力隊の人達と同じ釜の飯を食って共同生活したことで、彼らの生き生きとしたエネルギーを吸収させてもらったことだ。また、彼らの現場での献身的な活躍ぶりを目の当たりにし、近ごろの若者も捨てたものではないな、と感心させられた。今後、他地域でもさらなる活躍を期待したい。

最後に述べておきたいことは、今回東京出発時からずっと付いて来てくださった看護師の存在が非常に大きかったことだ。各自健康管理には十分気を付けているつもりでも、こんな僻地^{へきち}で何かあったときには直ちに相談できるという安心感が目に見えないファクターとなってわれわれが仕事に集中できる基となっていたことは確かである。宿舎では食事面でも何かと健康管理にいろいろと気を使っていたが、おかげでわれわれ一同（第4陣、第5陣）、下痢、熱中症などにかからず元気で帰国できたことを感謝したい。

そして私自身、この灼熱の厳しい環境の中で、微力ながら自衛隊支援という役目の下、スマトラ津波の被災者のために少しでもお役に立てたと自己満足して帰国した次第である。

本日、JICA（緒方貞子理事長）より今回の国際緊急援助隊参加につき感謝状を授与する旨連絡があった。謹んでお受けしたいと思う。

インドネシア津波災害・自衛隊支援活動に参加して

ふじなみ としお
藤波 敏夫（元 明和産業）

2005年2月15日から3月1日までの約2週間、インドネシア・スマトラ島のバンダアチェ市に自衛隊の医療活動に通訳として派遣された。インドネシアは7年



自衛隊宿営地（空港内）にて（筆者）



バンダアチェ診療所全景

間の駐在経験があったが数百年に一度あるかないかの大災害であり、緊張感をもってバンダアチェに赴いた。

ラマラ自衛隊医療キャンプ

自衛隊医療活動は先発したJICA医療チームより引き継ぎ、1月23日、ラマラのサッカーグラウンドで開始されたが、2月13日からは外科のみとなり、内科、眼科、小児科はミボの保健所に移転された。われわれが活動を開始した2月17日以降の患者数は、ピークで30名弱と移転前の10%程度であった。すでに津波発生より1ヵ月半以上経過し、緊急外科患者の来訪はほとんどなく、釘を踏み貫いた男子小学生が先生に連れられて来たが化膿^{せんそく}していなかったため快方に向かった、また喘息^{ぜんそく}の発作で息も絶え絶えの中年女性患者は、点滴と呼吸マッサージの処置の後、ミボに搬送された等の緊急患者があったがいずれも津波と直接関係ない患者であった。その他大多数の患者は消毒、ガーゼ交換がほとんどで、多少物足りなさを感じたものである。

ある日、地元の小学生20～30名ほどが招待され、自衛隊歓迎セレモニーが行われ、自衛隊より子供たちの写真、文房具等が配布され、地元住民との交流と自衛隊広報活動が行われた。医療活動の主体はミボになったとの印象であった。しかし印象深い患者が1人いた。それは20歳代の男性で、両足の内側のモモの肉がえぐり取られてかなり時間経過していたが、肉が盛り上らず皮膚の回復能力が破壊されたようであった。心にも大きな傷を負ったようで、伏目がちでPTSD（心的外傷後ストレス障害）が懸念された。松葉杖で友人に支えられる状態であったが一日も早い回復を祈るのみ。お年寄りにアチェ語しか話せぬ人もあり、自衛隊が雇った現地人通訳の助けを借りることもあったが、患者数の減少で問題なく業務が遂行できた。

ミボ保健所における支援活動

ここは朝から60～70名の患者が待っており、連日、

診療終了まで200名を超える患者が押しかけ盛況であった。受付は現地保健所職員が行い、私は第1~4診療室へ患者を振り分け、受付・待合所で活動した。振り分けは患者より病状を聞き、自衛官に診療室を判断してもらい、それを患者に伝えるのだが、第4診療室がインドネ

シア人医師の担当で、そこに振り分けられた患者は日本人医師にしてくれと苦情

を言ってくるケースが多々あり、その説得に苦慮した。患者自身が振り分け番号を改ざんして日本人医師の診察を受けるちゃっかり者もいた。

待合室の混雑状況から、振り分け業務を一時停止することがたびたびあったが、現地職員の名前のつづりを読解できぬ文字が多々あり、患者に聞くことがしばしばであった。待合室では振り分けられた患者を順番に呼び出すのだが、「ここは風通しが悪く、人息れで暑く、子供がいるので順番を上げてくれ」とか、「たくさんの病状を訴えたのにこれしか薬がもらえなかった」とか、「やはり日本人医師の診療を受けたい」と訴える人でまるで苦情処理班であった。さらに、そのたびに私のそばに患者が集まってくるので「順番に大きな声で呼びますので座ってください」と叫ばねばならなかった。全身のかゆみ、手足のしびれ、腹痛、胸の痛み等を訴える患者が多かったが、これはまさに生活習慣病で、井戸水、雨水の溜め水で水浴、洗濯、調理に使用しているのが原因であると思われた。

生活環境・安全対策

宿舎は24時間私服警官が常駐し、ラマラキャンプの往復も私服警官が同行、ルートも2~3日ごとに変更された、活動地区ではインドネシア国軍の兵士に守られ

ており、安全対策は万全であった。日常生活は朝7時半出勤、昼すぎには帰宿舎する半日業務であった。昼夜とも単独での外出は禁止されているため、昼食後は



市街に残された漁船

昼寝、読書で時間をつぶした。

ここアチェ州は非常に厳しいイスラムの教えを厳守する地域なので、われわれも禁酒生活を強いられた。このため食事が最大の楽しみであった。大家さんのお母さんの料理は美味しく、特にアヒルやカレー料理は抜群で、ストレスも相まって赴任5日間で体重が3kg増量してしまった。冷水浴、和式水洗トイレ生活は経験があり、問題なかったが、同行の青年海外協力隊のOG（うら若き女性）も完全に適応しているのには感心した。

津波災害現場、住民の恐怖心

今回の津波はスマトラ北海岸、西海岸の数百kmにわたり、海岸より5kmの内陸を襲い、所によって高さ45mとケタ外れの破壊力を持った津波

であったとのこと。バンダアチェ市の北海岸地区の視察現場では、東西方向はほとんどさえぎるものがなく、地平線まで瓦礫の原野が見渡せ、広島、長崎の原爆投下直後もかくの如きかと想像された。

海岸より10mほどの所にあるイスラム教会（モスク）が原型を留めていたのは驚きであった。今後、おそらく宗派の聖地となることであろう。地震本来の被害は直下型でないためか意外と少なく、大きな横揺れが2~3分くらいであったため、上屋が

重たい鉄筋コンクリートの大きな建物の1~3階部分が潰れた程度であった。宿舎への帰路、道端に付近の住民が多数出ていたが、余震があった様子。このような光景は余震のたびに見られるようで、夜間に余震があり、誰かが山に向かって走り出し、集団暴走が起こったこともあった。まだまだ津波への恐怖は住民の心を蝕んでいと感じた。

2月28日朝、10年後の災害地に再訪したいと思いつつジャカルタに向け帰路についた。



災害現場にて
後方土台のみ



津波にも耐えたモスク



地震の被害を受けたビル

パキスタンにおける シニア海外ボランティアの活動

JICAシニア海外ボランティア
パキスタン中小企業（軽工業）支援

さかい くにひろ
酒井 邦展（元 トーメン）

パキスタンはアフガニスタンに最も近い国としてNYの9.11テロ事件以降急速に米国接近（ムシャラフ大統領の決断）、アンチテロリストの旗頭としてクローズアップされ、最近ではインドとの雪解け外交により両国の和平ムードを高めている。現在の外貨準備高は125億ドル、03/04年度GDP成長率は5.4%、04/05年度の目標である6.6%は達成可能と見られ、国際機関では一様に「優等生」との判断をされている。

そのパキスタン経済を担う中小企業、特に自動車部品・繊維産業・皮革製品・プラスチック・水産加工など軽工業のレベルアップは当国の最重要政策とされている。そうした背景のもと我が国に対しシニア海外ボランティア（SV）派遣の要請が出され、これを受けてABICがグループの人選に当たり、我々5名のSVが2003年11月と2004年4月の2回に分けてそれぞれ1年の任期で派遣された。カウンターパートはパキスタン政府工業省傘下のSMEDA（中小企業振興庁）である。



SMEDA事務所にて
左から（敬称略）、大高、宮崎、酒井（筆者）、不破、松田

グループのメンバー：（ ）内は指導科目

大高弘太郎（機械加工）	67歳	元 新興産業
松田 章（原料管理）	69歳	元 ユニチカ
不破富男（工程管理）	65歳	元 東洋紡績
宮崎隆雄（電子機器加工）	64歳	元 ユニチカ
酒井邦展（コーディネーター／市場開拓）	63歳	元 トーメン

パキスタン経済の好況の一端を支えているのは同国全輸出の65%を占める繊維産業である。その原動力は世界第5位の原綿生産量と安価な労働力であるが、輸出の中心は糸・原反（織物）であり、これを加工した最終製品（縫製品）は輸出額で40%を割り込む。当国繊維産業にとってはこの付加価値のアップが最重要課題だ。繊維製品の輸出先は米国、EUが中心であるが、

2005年1月1日から実施のWTOによるクォータ制廃止により、中国ほか東南アジアの国々との厳しい競争にさらされることとなり、価格だけではなく品質の向上は避けて通れない深刻な課題となった。

SMEDAからの指導要請はこの繊維産業のレベルアップに対するものとなるが、筆者を除く4名は大高SV（縫製加工）、松田SV（織布）、不破SV（紡績）、宮崎SV（ニ



縫製



縫製加工の指導内容を社内教材にするため
ビデオ撮影し記録



ニット



織布



紡績

ット)とそれぞれ40年以上の経験と実績を有する繊維工業の専門家であり、この要請にうってつけとなった。

パキスタンの紡績設備は現在1,100万鍾と日本の繊維産業華やかなりし頃に匹敵する規模に成長し、織布においては世界最新鋭のエアージェット織機がここ数年毎年1,000台という規模で輸入されている。しかし織布・ニット以降の工程である染色加工・縫製加工と広がる裾野はそれに相応した発展を見せていない。この裾野開発のための技術および生産性の向上が我々グループに課せられた任務でもある。

我々SVは、ある程度の視察期間を設けた後実際の指導に着手した。分野により1工場4日～5日から7日間の指導を行い、改善項目の提案を行うもので、原則として新規投資(機械の入替など)の提案は行わず、あくまで現状でどんな改善が出来るかを指導することとした。我々の指導には必ずカウンターパートから技術スタッフが付けられ、SV帰国後も同じ活動を続けられるようSVに同行し、指導内容を逐一勉強し技術移転を受ける態勢を採っている。

この1年間の指導を通じて言えることは、工場長が自分の首を気にするあまり工場の実態をオーナーに報告せず、そのため機械設備に相当ガタが来ているのに放置されているという事態が散見された。加えて、工場管理の原則すら守られていない工場が多く、SVの改善提案はオーナーに新鮮なショックを与えることとなった。

また、最終製品である縫製の分野ではほとんどの工場で管理者クラスの品質に対する認識が欠けており、正しい製品の品質は何かをはっきり理解できないままQuality controlを行っている状態であり、SVの指導で初めて何が高品質かを悟ったというケースが多く見られた。

1年余りで約100工場の指導を実施し、数十社から感謝状をもらうという成果を上げ、また要請に応じ繊維技術専門学校でも講義を行うなど我々SVの活動は業界で高い評価を受けている。カウンターパートからはさらに1年の延長要請が出され、延長が決定し現在に至っている。

この国には繊維産業に係わる工場が3,000社以上あると言われている中、我々SVが回れる工場の数は限られているが、指導した工場がコアとなりシナジー効果が現れることを期待しつつSVは今日もまた工場に出かける。

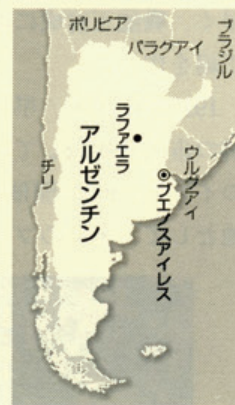
パンパの街、 工業製品輸出に意欲

JICAシニア海外ボランティア
アルゼンチン貿易指導者育成

たかやま もとすけ
高山 元佑 (元 住友商事)

西・葡・伊・英・日・華6ヵ国語版別刷の企業誘致用小冊子が最近完成した。作成者ラファエラ市(以下、ラ市)は人口9万人、ブエノスアイレス市北方約600キロにある内陸都市である。農牧中心のパンパ平原にありながら、国際化に対する意気込みが強いことを伺い知ることができる。JICAシニア海外ボランティア(SV)としてここで2年間を過ごした(ロサリオ150万、サンタフェ50万に次ぐサンタフェ州第三の都市、JICAとはSV・コンサル受け入れ、訪日研修を通じ関係が深い)。

何かにつけ、ブエノスの存在が際立つ亜国は、ブエノス州とその他諸州の二国連邦ともいわれるほどである。最近、コルドバ、サ・フェなど中部3州が経済・文化など、幅広く協調することに合意した。“巨人”に対抗意識を燃やす地方勢の結束である。しかし、農牧に関しては、従来からサ・フェ州の主導は揺るがない。輸入国の期待を受け、小麦からの転作、新規開墾により、大豆作付面積増加にやっきの亜国だが、その鍵を握るのはパンパである。連作による土地の疲弊、農薬使用による影響が指摘されるなか、大豆の進撃は続き、牧場が移動を余儀なくされることもある(輸出税、穀物



事務所で新旧カウンターパート(CP)と。右端が前CP(現 州下院議員)。二人目が現CP(市経済局長)、左はCPアシスタント。

20%、工業製品5%、全税収の1割を担う。

この地に最初に足を踏み入れたのはイタリア人で移民開始翌年の1881年のことである（伊移民開始80年、スペイン移民に300年の後れ、独立は1816年）。市民の過半は北部ピアモンテ（スイス国境近く）出身者の流れを汲む。勤勉、質朴、進取が出身地の気風という。ラ市が酪農品のみならず、工業製品でも健闘しているのは、初期移住者の出身地と無関係でない。移住者は到着後いち早く、職能工育成に取り組み、実践の場として金属加工工場を作った。

1920年代後半、早くも自動車レースが開催され、大勢の市民が観戦している写真が残されている。南米初のインディ300の開催地であり、今も国内サーキットの地として、多くのファンが馳せ参じる。



カーレースの伝統。1921年のチャンピオン（米国製DORT改造車）。26年500マイルレース開始、70年インディ300初の米国外開催地となる。

市民は純朴で親切、日本人には殊更にフェアであった。街並みは中央広場を基点に碁盤目に整備され、ゆったりした石畳路を緑豊かな樹木が覆い、手入れの行き届いた公園の草花と共に心を和ませてくれた。出会ったブエノス出身のタクシー運転手は人情と治安の良さが気に入り、“衝動的移住”をしたという。かつてのドイツ人企業実習生で、いまは地元企業で活躍する中堅社員にも会った。どことなく魅力のある街のようだ。しかし、なにかと気ぜわしく、変化を求める日本人がこの地に長居することは容易でないと思う。

昨年来、大豆・自動車部品輸出を牽引役に景気が回復、休眠中の商店が再開する光景を頻繁に見かけた。地域パワーの更なる強化のため、市は人口増加を目標に掲げ、西・伊に移住した市民にもUターンを呼びかけている。10万都市に仲間入りし、晴れて外国製地図に登場する日も遠くないことだろう。一段と経済力を増したラ市が、亜国経済の元気回復の原動力の一端を担う時期が到来しないものかといささか過大な期待も抱いている。

さて、命題は貿易指導と輸出実務OJT。ラ市は自動



国旗を非常に大事にし、国旗の日という祭日がある。中央は警察署。街中は緑が豊富。

車部品、農機具、飼料・食品機械（含む冷凍機）など酪農関連機器の生産も活発で、官民あげて輸出に意欲を燃やしている。エンジンバルブなど輸出比率6割を超える製品もあり、酪農品と並ぶ主力輸出品である。欧米に工場、配送センターを持つ企業、米企業を買収し設備移転した企業もある。一方、経済不況、為替大幅切り下げの結果、欧州資本を受け入れた企業も数社ある。従業員数百人を超える企業は一握りで、大半は従業員数十人以下、輸出も羅米域内止まりである。ほとんどが家族経営で、その多くが工業団地に集結する。

インド・南ア（共に同種製品輸出国）・中東市場に的を絞り挑戦したが、反応の鈍さは想像以上であった。反応を示した貴重な相手先とも、具体的商談まで至らなかった。目的を共にする仲間が相手国に不在だったのが弱点であった。唯一の成果は、蜂蜜輸出を託した日系食品商社が1年かけて商談を纏めてくれたことであった（対日輸入9割以上中国、二番手の亜国2〜3%）。単なる紹介役に過ぎなかったが、養蜂家組合から感謝状（額）まで届けられ、市役所にちょっぴり面目を施すことができた。

北スマトラへ出張講義に

ふじかわ かずひろ
藤川 一弘（元丸紅）

2005年1月17日から21日まで、インドネシア、北スマトラ州のメダンで開かれた「ASEAN-JAPAN Workshop on SME Development through Regional Trading House」（主催：海外技術者研修協会—AOTS）の講師として派遣され、初日は、総合商社の歴史・組織・機能等を約2時間、2日目は、いわば“商社経営論”で、事業計画の作成から資金調達・人事管理・外為と貿易



実務およびリスク管理等を約4時間にわたり英語で平易に解説するという仕事である。

2004年末の北スマトラ大地震から間もない時期であったが、メダンは天然の要塞なのか、ほとんど無傷であったため、インドネシアをはじめアセアン諸国から選抜された企業の中堅管理職や政府関係者約30名がAOTSの招きで参集した。講師陣もインドネシア貿易省役人やタイ、マレーシア等の大学教授や官民の専門家から成り、WTOから輸出計画・マーケティングに至るまで幅広い研修と交流が行われた。

話は前後するが、今回の出張講義の経緯は、2004年12月10日前後にABICメコンデスク・コーディネーターの吉川氏から、かねて関係の深いAOTSからの急な要請で、貿易志向の強いアセアンの企業家研修のために是非行ってほしいと、どうやら“NO”とは言いにくい雰囲気電話を頂いた。

準備期間が短く、国内なら講師2〜3名で分業するぐらいのテーマだなと感じて躊躇したが、幸い、テーマによっては他の講義での資料が残っていたので、海外出前講義はABICの本望なりと、エイヤーでお受けした次第。

ところで、商社OBは何処にでも現れるもので、今回忘れてならないのは、ABIC会員で、3月までメダンでJICAのシニア海外ボランティアとして、経営指導をしておられた、石川清氏（11号に紹介記事掲載）の献身的な協力である。



同氏は、年末から終始AOTSと現地協賛者（IETC）との調整役をされ、私にはメールでの津波後の状況報告や、互いの講義内容のすり合せもしていただき、講義では現地での実体験に基づいたマーケティング論を展開後、参加者を工場見学にも案内して好評を博された。

私の滞在は僅か3日間であったが、印象に残った事を少し以下に記す。

- ①メダンは直接の津波被害はなかったものの、会場のNOVOTELはバンダ・アチェに入る各国救助隊の活動拠点と化し、ホテル中、迷彩色の服装の男女兵隊が動き回る異様な風景に遭遇した。
- ②参加者の英語力は国により若干の温度差はあるが、総じて高く、各々国家代表の意気込みでいるのか、大変熱心、冒頭の自己紹介では、制限5分を超えて延々と自国のPRをやり、進行役が苦勞していたのが愉快でもあり、その熱意には頭が下がった。なんと、各代表中、英語が最も洗練されていたのが、ミャンマーのお役人。「米国仕込みですね？」と聞くと、‘してやったり’という顔をしていたのが、なんとも爽やかであった。
- ③私個人では、今まで接点のなかったAOTSが力を入れる、途上国での事業の意義を再認識できた。

アジアでは、香港・中国畑の長かった私にとって、興隆するアセアンの将来を担うエリート達の息吹に触れたのが成果であり、我々の経験談が、少しでも役に立ってくれればと願いつつ、救援用の軍用機がいやに目立つメダン空港を飛び立ち、シンガポールに向かった。

ブラジルでの日系人国外就労者情報・援護活動を終えて

たなか あきひろ
田中 昭彦（元 三井物産）

ブラジル国サンパウロ市にある（社）国外就労者情報・援護センター（CIATE）専務理事として2年間（2002年4月～2004年3月）勤務しました。サンパウロは約40年前、商社の若手駐在員として4年間勤務し、その後も仕事の関係で何度か訪問した所ですが、この度は利潤追求を目的としない分野での仕事を経験し、大変有意義であったと感謝しております。

日本からブラジルへの移民の歴史はまもなく100年を迎えることになりますが、その間、移民の総数は約



CIATE巡回講習会、バストス市卵祭り展示会場CIATE相談コーナーを表敬訪問のブラジル国連邦下院議員パウロ・小林氏と（左、筆者）

27万人に達し、日本移民達はその勤勉・誠実・向上心・モラルの高さからブラジル社会において高い信頼を得ました。特に子弟教育に熱心であったことから、子孫の中から裁判官、大学教授、弁護士、医師、大企業幹部等になり、ブラジル社会の中核で活躍する人達も多く出ています。

現在、ブラジルにおける日系人の数は約140万人とされており、そのうち85%はサンパウロ州、パラナ州に居住しています。

1980年代、ブラジルの未曾有の不景気と、一方、日本の好景気による労働力不足といった環境下、高い賃金を求めて就労を目的としてブラジルから日本へ渡航するいわゆる“出稼ぎ現象”が始まり、1990年の日本政府による「出入国管理法」改正施行を機に出稼ぎが急増し、現在、日本における日系ブラジル人の数は28万人近くに達しています。彼等の日本における就労分野は自動車・電化製品・製材組立、弁当加工食品等の単純労働部門ですが、今や彼等の存在は日本産業発展になくてはならないものとなっております。

CIATEは、1992年、日本の厚生労働省と現地日系3団体（ブラジル日本文化協会、サンパウロ日伯援護協

会、日本都道府県人会連合会）によって営利を追求しないブラジル社団法人として設立されたもので、事務所はサンパウロ市東洋人街のブラジル日本文化協会ビル内にあります。

業務目的は、これから仕事を求めて日本へ渡航しようとする日系ブラジル人に対し、適正な就労ができるよう各種情報の提供、指導・援護ならびに就職斡旋等を行うことです。事務所での日常業務は窓口相談（Eメール、電話、手紙も含む）、求人雇用斡旋、定期講習会開催（日本における労働条件、年金保険、医療補償、教育制度、交通法規、一般生活慣習等）、専門家を招いての講演会、日本語教室、広報誌の発行、マスコミ他来訪者の対応等です。

2ヵ月に1回、週末を利用して日系人の多い地域に出張する巡回講習会を開催しており、会場提供、参加者募集、ポスター配布など地元の日系人達の絶大な協力を得ています。中でも、日系人の多く居住する地域15都市に1名ずつ配置された15名のCIATEコラボドール（アドバイザー）の活躍には目覚ましいものがあります。コラボドールは、日本での就労経験があり、地元での人望が高く、日本での就労を希望する人達およびその家族に対し、親身になって相談に乗れる人が選定され、その活動はすべて無給のボランティアです。年2回、サンパウロ市のCIATE事務所に全員参集し、研修会、発表会を開催します。

私的生活においても、趣味の詩吟を通じて日系人社会の仲間に入れていただき、一緒に練習したり、全伯吟剣詩舞大会で共演したりといった楽しい思い出があります。

日本へ帰国後、1年が経過しましたが、ブラジルにおける日系人の方々のますますの発展と、日本に来ておられる日系ブラジル人の方々の職場での労働環境ならびに家族を含めての日常生活環境がより快適で有意義なものであることを切に願っております。



CIATE巡回講習会風景



第3回全伯歌謡吟剣詩舞大会での詩吟

ジェットロより 「アンデス乾燥果実普及 市場調査」受託について

ABIC中南米コーディネーター

もり かずしげ
森 和重 (元 三井物産)

2003年末にジェットロより「アンデス新食材産業育成プログラム」の国内流通市場調査を受託したが（ABIC Information Letter No.10 参照）、そのプログラム推進の延長線として04年11月に「アンデス乾燥果実普及市場調査」の業務を受託し、本年3月末に報告書を提出した。今回の対象品目は、未だ日本に紹介されていないアンデス地域の下記乾燥果実4品目について対日輸出の可能性を実地に検証する調査であった。

調査対象品目：

ボリビア産乾燥バナナ、マンゴ、パイナップルの

3品目

コロンビア産乾燥食用ほおずき（Physalis）1品目

合計 4品目

本件については、ABIC会員高橋征三氏がマーケット調査会社キーリサーチネット(株)を経営され、既にジェットロから加工食品調査受託の実績もあるので、同氏との共同プロジェクトとしてジェットロに応募し、受託したものである。

具体的には、現地からのカタログ・サンプル取り寄せ、乾燥果実食品輸入業者30数社にカタログを送り、興味をしめした14社にサンプルを送付し試食結果を調査票に記入し返送してもらうと同時に4社を直接訪問し、その場でサンプルを試食してもらい、そのコメントを聞くと共に、パッキングの材質やデザインに対す



乾燥果実のサンプル比較



乾燥果実サンプルのモニタリング調査

る評価をしてもらうというモニタリング調査であった。

日本の加工食品マーケットの中でも、とりわけ乾燥果実は、東南アジア、カリフォルニア、地中海諸国、中南米のチリー・ブラジルなどから輸入されており、既に商品のイメージが確立されている。今回の対象商品は、自然乾燥を行っており果物そのものの風味があり、食べて見ると美味しいとの評価は受けた。しかし、現在日本の乾燥果実マーケットに出回っている製品とは、味・外見・包装材料・包装の仕方・ラベルの表示など異なっているため、日本市場への参入は容易でないと思われる。そのため、調査結果を元に、日本市場進出のための改善策をメーカーにアドバイスした。ただ、全く参入の余地がない訳ではなく、機能食品・健康食品などのニッチな市場での販売可能性はあると思われる。一方、コロンビア特産の食用ホオズキは、日本には未紹介の果実であり、酸味は濃いが多量のビタミンやミネラルを含んでいるので、美容や健康志向にうまくのれば対日輸出は可能と思われ、数社から引き合いも出てきた。しかし、日本の消費者の商品選択基準は、非常に厳しいので、日本市場進出のためには、味や風味、品質、値段、安定供給保証の他にパッケージング（包装・ラベルなど）が極めて重要である。

本調査報告書は、日本の乾燥果実市場の本格的調査は始めてなので、他の地域の乾燥果実の生産・輸入販売のオリエンテーションにも活用出来るとして、ジェットロから高い評価を受けている。

「健康博覧会2005」の 中国語通訳（バイリンガル アドバイザー）体験記

いげざき もとひこ
池崎 元彦（元 日商岩井）

私は2005年3月16日～18日の3日間、東京ビッグサイトで開催された「健康博覧会2005」で台湾の中小企業（美容器具メーカー）の通訳として楽しい経験をしましたのでご報告をいたします。

ある日ABICコーディネーターの方から電話があり、ABICのお得意先の国際展示会主催会社から中国語通訳者紹介の依頼が来たので、スケジュールの都合がつけばやりませんかとのことでした。一般的にはこのような例ではABICとしては通常は通訳可能と登録のある複数の会員にメールを出して希望者を募っていたことを私は知っていたので、なぜ電話なのですかと聞いたところ、今回は突然の依頼で、また至急返事しなければチャンスを失うので電話をしたということでした。

私は美容関係の通訳などは出来ないとまずは固辞しましたが、ABICコーディネーターの皆様がわれわれ会員のために日頃大変な努力をしておられることを知っていましたので、それを簡単に断っては申し訳ないと思い直してお受けすることにしました。

初日、不安な気持ちで会場に行ったところ、思いがけなく台湾のメーカーの女性2人（部長、課長）が待っており、挨拶も早々に製品の展示を始めました。展示製品は超音波を利用した小さな美顔器具とアロマ発生器具でした。

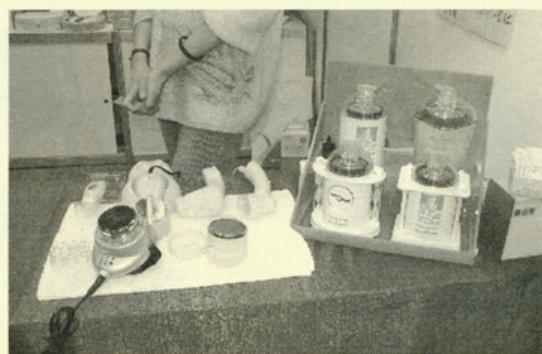
博覧会展出の目的は、既に日本の有名化粧品メーカーの製品をOEM（取引先の商標で販売される製品の受注生産）で製造しているが、更なるOEMの依頼先を



開拓することと自社製品の日本での流通ルートの開拓でした。このメーカーの製品に対する見学者の興味は、始めはマアマアというところでしたが、日を追うごとにターゲットとなる見込み客との商談が増えてきました。最終日などは当該製品を顧客に見せたい、社内で検討したいなどの理由で展示品を是非売って欲しいとの希望者が数社現れて分配をするのに困るような状況で、博覧会に参加した成果があったと思われます。

当初、私は通訳というから、各展示コーナーの若い女性のように一日中立ったままピラ配りと通訳をするものと考えていましたが、実際は小さなテーブルに座って商談の通訳をすることが多く、疲れることはありませんでした。そして慣れるにしたがい単なる通訳でなくABICバイリンガルアドバイザーとして本領を発揮して、初日の午後からは私が商品説明や商談を仕切る状態でしたが、気の強い台湾の2人の女性も私のペースに慣れてくれました。そして最後日には先生（老師）と言わせてしまいました。

実はこのペースに乗せるには少々苦勞がありました。それは、初日に来た近隣の業者がこの製品に非常に興味を示し、OEMを検討したいので是非工場まで来て欲しいと希望し、初日から残業代も無しで深夜の12時まで付き合わされたのです。この事で彼女たちの信頼



を得たのかも知れません。

今回はここでは記せないぐらいの多くの収穫がありました、中でも久しぶりに商談の第一線に参加したことが楽しかったこと、中国の製品が席捲している製品カテゴリーの中でも未だ台湾製品に対する信頼があることを実感したことは有益でした。特に健康博という

ことで、若い女性のモデルが多いのでヒマを盗んで鑑賞に行くなどの楽しみもあり、健康と若返りに効果がありました？ また、安いと文句を言った謝金で飲み会にも数回参加できました。会員各位もチャンスを逃さずに参加されることをお勧めします。ABICコーディネーターの皆様に感謝！！

自治体への協力

大分県産品対中輸出振興 アドバイザーとしての 活動を振り返って

かわぐち ひろし
川口 洋 (元 日商岩井)

大分県から、2004年度大分県産品対中輸出振興アドバイザーを任され、大分県商業・サービス業振興課とともに、県下中小企業の対中輸出のお手伝いをしました。

一言で県下中小企業の対中輸出と言ってもその進捗度はマチマチで、“いいちこ”焼酎のように実績があるものや、成約を拡大中の企業、商品から、例えば海水真珠生産企業でこれから初めて中国市場を探ってみようか、というところまで千差万別でした。

県下企業の活性化のため、距離的、時間的に至便な巨大中国市場への進出・勧誘からスタートしました。まずは、中国市場に興味がある企業、商品的に有望と思われる企業等に参集願い、中国市場への進出勧誘の講演会を大分県庁で2～3ヵ月間隔で行いました。

中国が巨大市場であることは誰しも認めるところで、講演会等には数多くの企業に参加いただき、講演会を聞いて、一度、中国市場たるものを本気で検討してみようか、という企業が順次増えたことはアドバイザー冥利に尽きるところでした。

講演会では、いわゆる“勧誘”のオイシイ話と中国一般常識的な話を先行しました。その後講演会も回を重ねるにしたがい、オイシイ話の反面、矛盾する事柄を披露、①中国商売の注意点、中国人の強かさ、②中国は、法治国家ではなく、人治国家、拝金主義的要素等は否めない等の説明も忘れずにいたしました。

大分県庁およびアドバイザーとしての第一段階の目標は、県下輸出希望業者と中国側輸入希望業者との“顔見世興行”の仲人役といったところでしたが、本年2月23日、上海にて、県下10余企業の参加を得て産品展示・商談会が開催されたことを喜んで報告させてい

2005年2月23日上海での大分産品展示商談会



たきます。

この展示会では、日中双方の名刺交換が実現しましたが、これを発端としての交信・交流こそが本当のビジネス成立に、一番肝要なことであり、この育成・成長を熱望している次第です。

小中高校向け国際理解教育 グループだより

在日外国人小・中学生に対する 日本語指導活動に確かな手ごたえ

日本の学校に編入してくる在日外国人の小学生・中学生に対するABIC会員による日本語指導は2003年度から開始し、昨年度2年目を無事終了しました。これは1回限りの講義・講演と違って、6ヵ月から1年の長期に亘って、同じ生徒に対し行う、「結果の出る教育活動」です。

対象は種々事情で日本にやってきた学童生徒です。最初はほとんどが日本語が分からず、友達もできない異国の子どもたちを地道に根気よく学習指導していく、講師も延べ10名に増え、一種の学校運営のようなものになりました。

依頼主はある地方自治体の教育センターで、センター経由業務受託契約の後、講師は市内の公立校に行きます。学令は小学校1年生児童から中学3年生までの生徒、国籍は様々で中国、台湾、韓国、フィリッピン、1年目は小学生ばかりでしたが、2年目から高校受験を控えた中学3年生の指導も依頼されるようになりました。

ABICベテラン講師による個人授業

「取り出し授業」といって、時間割の一部をその子だけ「別室において日本語指導」を受けさせる方法と、「普通の授業で講師が隣に座って、先生の言うことを子供に同時通訳」と二つの方法があります。いずれもいわば一対一の家庭教師スタイルの「個人教授方式」ですが、それぞれ日本語の解釈進度の違う外国人の指導にはこれがベストの方式です。

週1回1日2時間、講師はABICのそれぞれ当該国に駐在経験をもつベテランが、当該国語で子供の気心をほぐし、相手の学令、度合い、ニーズに応じて、工夫を凝らして教科書を調達（または手作り）して適切な指導をしています。

ABIC講師の二つの事例

今年度も含めると3年間連続して依頼を受けているのは、ABIC会員が指導するようになってから、何も話せなかった、書けなかった、読めなかった子供達が著しく日本語能力を身につけ、日本の学校に適應していった確かな手応えがあったからに他なりません。その事例として二つを以下にご紹介いたします。

①2004年度、初めて中学3年生の中国人女子を受け持ったABIC会員がこの春先、私（コーディネーター）の家に電話してきました。「あの子が無事某難関都立高校に受かりました！」という喜ばしい報告です。その前に試験に出そうな200漢字の特訓をやっていたことを聞いていましたので、ああ本当に師弟共々努力の甲斐あったなと思いました。

②またある中国人小学生兄弟を指導している講師からは、「休み時間や、放課後など二人だけで遊んでしまい、日本人の友達ができない、父母あてに手紙を書いて協力を要請。しかしながら終わり頃にはかなり改善がみられ、兄弟は日本語学習に意欲を示した。日本語指導とは、単なる日本語（本人たちにとっては外国語）を教えるだけでなく、子供達の立場に立って、異なった社会への適應、異文化への適應を手助けする活動であるとの思いを深くしている」との指導後の感想を寄せられました。そしてこの春、この兄弟のお兄ちゃんの小学校の卒業式に講師が特別に招かれる名誉に浴しました。（他の事例も沢山ありますが、割愛します）

クラスメイトに芽生える国際交流

厳しい外国生活と戦って、環境の変化を乗り越えようと努力している小さな在日外国人たちは、勉学に必死で取り組んでいます。そしてやがてその子達を取り巻くクラスメイトや先生が本当に仲間として受け入れるようになった時、真の国際感覚・国際交流が芽生えます。

この外国人児童・生徒の学習手助けは地味で根気のいる仕事ですが、ABIC会員がその特性を活かして、学校の悩みを解消できる本当に意義ある「国際化」の仕事だと最近つくづく思っております。講師の皆様のご尽力に誌上で感謝申し上げます。

（国際理解教育講師派遣グループコーディネーター

ふじむら のXZる
藤村 登）

留学生支援グループだより

東京国際交流館での活動

2001年にスタートした「日本語広場」での日本語クラスは、2004年度は講師10名が毎週13教室を分担、延べ人数で1,730名の留学生および家族の方々が参加しました。参加者の約半数が日本に入国の直後ないしは短期滞在後の入館者のため、初級クラスで日本語を学びながら日本の生活習慣風習についても知識を習得する機会として最長2年の在館中に有効活用しています。さらに研修を重ねて日本語の検定試験に挑戦、合格して帰国される家族もおられます。

また2002年から始めた日本文化教室も茶、華、書、碁、将棋、空



日本語



生花

手の6教室は年間参加者数、250名を数えるに至っています。

2005年度は4月の新入館者のニーズに応じてバザーを去る5月28日に開催しました。当日は好天に恵まれ、赤木館長、吉田ABIC理事長、レインボーロータリークラブ原代表各氏の挨拶のあとブッフェランチをはさんでABIC会員、日本貿易会ABIC支援委員会加盟商社社員等、ロータリークラ



バザー

ブ会員の皆さんの提供品によるバザーを囲んで賑やかに国際交流が行なわれました。貴重な品々を多数お送りいただいた各位に深謝申し上げます。

また、秋には各教室の一年の成果を披露、年末年始には日本語発表会、スキー旅行の開催を予定しています。

(留学生支援グループコーディネーター やまだ まさし 山田 雅司)

個人情報の取扱いについて

2005年4月1日

特定非営利活動法人国際社会貢献センター
理事長 吉田 靖男

当センターは、国内外での社会貢献活動を推進することを目的とし2000年4月に創立以来、活動会員として約1,600名の方々に入会いただき、さまざまな分野で活動を行っております。

本年4月1日よりの個人情報保護法施行にともない、当センターは会員の皆様から連絡いただいた個人情報の取扱いについて、法令および諸規範に準拠し、個人情報保護方針、規定を定め、役職員に周知徹底し、適切な保護、管理に努めてまいります。

ご理解、ご協力をお願いいたします。

個人情報保護方針につきましては、下記当センターホームページをご覧ください。

http://www.jftc.or.jp/abic_outline/privacy.pdf

会員入会のお願い

国際社会貢献センターの運営費は、会員の皆様から頂く会費で賄われております。今後ともさらなる会員の皆様のご援助、ご協力をお願い申し上げます。

種類	内容	年会費
正 会 員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体 一口 50,000円
		個人 一口 10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。	法人及び団体 一口 10,000円
		個人 一口 5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要 — —

正 会 員

団体・法人 (17社)				(社名五十音順)
〈10口〉	(社) 日本貿易会	伊藤忠商事(株)	住友商事(株)	双日ホールディングス(株)
	丸 紅 (株)	三井物産(株)	三菱商事(株)	
〈6口〉	(株) トーメン	豊田通商(株)		
〈4口〉	(株)日立ハイテクノロジーズ			
〈2口〉	稲畑産業(株)	長瀬産業(株)	阪和興業(株)	
〈1口〉	協同木材貿易(株)	興 和 (株)	JFE商事ホールディングス(株)	蝶 理 (株)
個人 (4名)				(敬称略・氏名五十音順)
	池 上 久 雄	小 島 順 彦	寺 島 實 郎	宮 原 賢 次

賛助会員

法人 (3社)

- 〈60口〉 (株)東京リーガルマインド (4月1日入会)
 〈1口〉 (有)イーコマース研究所 キーリサーチネット(株)

個人 (298名)

下記は2005年3月以降、ご登録お申し込みいただいた5名の方です。 (敬称略・氏名五十音順)

- 〈1口〉 池崎 元彦 小野 勝 渋谷 和明 戸川 隆夫 山口 真人

活動会員 1,482名

(2005年5月31日現在)

賛助会員・活動会員ご入会は、当センターホームページ「賛助会員・活動会員入会案内」(http://www.jftc.or.jp/abic_register/index.html)の申込書にご記入のうえ事務局宛郵送いただきますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先：Tel. 03-3435-5973 Fax. 03-3435-5979 扇、道家

e-mailアドレス・住所等の変更届けはお忘れなく!

e-mailアドレス・住所などの変更がありましたらご連絡ください。
 転居先不明で返送される例が増えています。

e-mail: mail@abic.or.jp FAX. 03-3435-5979